

令和6年9月20日指定

まつもとほんあいかたぞめ

松本本藍型染



【製造地域】

松本市

概要

藍は世界最古の染料と言われ日本各地で染色に使用されてきた。松本の藍染めは、江戸時代から広く行われるようになり、明治44年には浜染工房が創業され「藍の型染め」（生地型紙を置いて糊付けし藍を染める方法）の技術を県内で唯一受け継いでいる。藍型染めに欠かせない防染糊はもち米から作り、藍を発酵させた「すくも」に灰汁などを加えた染液を用いる伝統的な製法であり、化学薬品は一切使わず自然環境にも優しく、本藍が出す美しい青色によって、着物だけでなく、バックやストール等様々な製品が作られている。

歴史・沿革

藍染めの歴史は古く、日本では、飛鳥時代から藍が栽培されていた。鎌倉時代になると現在のような染色法が確立され、江戸時代には松本でも藍の栽培が盛んとなり、藍の殺菌力や防虫効果等を理由に、農作業や山仕事など働く庶民の生活着として親しまれ、多くの紺屋（藍染め事業者）が藍染めを行った。

生地型紙を合わせて染める型染めは、源義経が所有していたと伝わる「籠手の家地（こてのいえじ）」が最古と伝えられており、江戸中期には型染めで柄を付けた衣類が全盛となったとされる。

大正時代になると海外から化学染料が輸入されたことで、次第に天然藍で染める“本藍染め”は徐々に衰退していった。昭和12年に「松本染色組合」が設立されて、昭和34年には組合員73名が在籍していたが、本藍染めと型染め両方の技法を引き継ぎ、現在も“本藍型染め”を行っているのは県内で浜染工房1社となった。

(問合せ先) 藍染 浜染工房

〒390-0828 長野県松本市庄内2-2-41

TEL : (0263) 26-3945